

『建設協同組合連合会の歴史——1912～1992年』

F. ファブリ 著 Franco Angeli 社
富沢賢治 (一橋大学教授)



本年1月の阪神大震災を契機にして建設協同組合が設立された。建設協同組合がどのような条件のもとで発展しうるかということを知るため

には、建設協同組合の歴史を調べる必要がある。

世界の労働者協同組合の歴史を見ると、建設協同組合の歴史はかなり古い。もっとも古く、しかも現在においても大きく発展している建設協同組合はイタリアにおいて見られる。

イタリアと日本は後発進資本主義国という意味では共通の歴史的条件をかかえている。イタリアはイギリスやフランスと比べるとかなり遅れて工業化し、協同組合運動が発展したのも19世紀中頃以降であった。運動は最初北イタリアで、失業、低賃金、劣悪な労働条件、粗悪で高価な商品などへの反発として起こった。最初の労働者協同組合は、運動の強力なエミリア・ロマーニャ州で建設業界にあらわれた。工業化の進展にともない農業労働者の多くが失業した。土地から引き離された農業労働者の多くは、排水やインフラストラクチャー改善のための公共建設作業に従事することとなった。彼らはこれらの公共事業を請負い、自ら運営しようとして労働者協同組合を組織したのである。

現代のイタリアの建設協同組合の発展のひとつの要因は、建設協同組合が連合会(コンソーシウム)を組織した点において見られる。現代のイタリアの労働者協同組合が活用しているコンソーシウムという形態は、協同組合間協同を強化するうえで有効な手段である。とりわけコンソーシウムは特定の契約を締結するための連合機関として活

用されている。コンソーシウムは非営利組織と認定されているので、公共事業の契約締結などのさい国家や地方自治体から特別の措置を受けられるのである。レガ(協同組合共済組合全国連盟)では、CONACO(全国建設協同組合連合)とICIE(建設業協同組合連合)というコンソーシウムが活動している。

このような建設協同組合のコンソーシアムの歴史を詳細に検討し950ページにわたる大著にまとめあげたのが本書、Fabio Fabbri, *Da Birocciai a Imprenditori, una Strada Lunga 80 Anni: Storia del Consorzio Cooperative Costruzioni, 1912-1992*, Milano, Franco Angeli, 1995,である。

本書は、前史をなすボローニャにおける協同組合の伝統(第1章)、1912-23年(第2章)、1923-45年(第3章)、1946-76年(第4章)、1976-92年(第5章)、の他に、統計と資料集から成っている。

著者のファブリ教授はイタリアの著名な協同組合運動史研究者であり、「発達した資本主義国における労働者協同組合の意義と発展の可能性」をテーマとした国際シンポジウム(日本労働者協同組合連合会主催、1992年、東京)にも参加し、協同総合研究所のメンバーとも交流を深めている。イタリア研究者による本書のより詳細な紹介を期待する。